

小学校での SEL-8S プログラム実践による保護者の子育て支援 —実践校における「子ども対象の SEL による子育て支援モデル」の検証—

Child-care Support by SEL-8S Program at Elementary School:
Examination of “Child-care Support with Social and Emotional Learning for Children”
Model at an Experimental School

小 泉 令 三

Reizo KOIZUMI

(教職実践講座)

井 上 豊 久

Toyohisa INOUE

(福祉社会教育講座)

(平成28年9月30日受理)

児童の社会的能力向上をめざして、社会性と情動の学習の1つである SEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School) プログラムを実践している福岡県内の公立 A 小学校の保護者を対象に、家庭での養育態度・意識等に関する調査を実施した。おもな結果は次のとおりである。(1) SEL-8S プログラムの認知度は約 8 割と高かった。(2) 回答結果を、福岡県全体の近年の調査結果と比較すると、ゲームの時間が長い、朝食摂取の割合が低い、就寝時刻が遅いといった傾向が見られ、家庭生活の課題として考えるべき項目が多かった。(3) 「子ども対象の SEL による子育て支援モデル」、すなわち学校での SEL-8S プログラム実践によって、保護者が SEL (社会性と情動の学習) を理解しそれに協力しようとする傾向が強まれば、それが保護者の養育態度・意識を高めるとするモデルを構造方程式モデリングを用いて検証したところ、一定程度の適合を確認することができた。こうした結果をもとに、今後の学校と家庭の連携の在り方について考察を行った。

キーワード：社会性と情動の学習、学校と家庭の連携、SEL-8S プログラム、子ども対象の SEL による子育て支援モデル

学校教育の成果を高めるために、家庭との連携は重要な意味をもつ。例えば、基本的生活習慣の習得には、小学校入学前の段階からの家庭教育の影響が大きいし、入学後も発達段階に合わせた生活習慣の向上と、さらに学習への取り組みでは家庭学習の習慣化などで家庭での保護者の役割は非常に大きい。

近年、子どもの社会的能力を家庭や地域社会だけでなく、学校でも高めるための意図的・計画的な取り組みの必要性が高まり、種々の実践が進められている。これは、学校生活での不適応行動(いじめ、不登校、暴力行為など)を予防するとともに、将来の社会的自立を図るためであり、その中核をなすのが社会性と情動の学習 (social

and emotional learning, 以下 SEL) である(イライアスら, 1999)。SEL は、わが国では「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、社会性(対人関係)に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」と紹介されており(小泉, 2011)、SEL のための学習プログラム(以下、SEL プログラム)は世界的にも多数開発されている(山崎・戸田・渡辺, 2013)。なお、SEL プログラムは特定の学習プログラムを意味するのではなく、上述の説明に該当する数多くの学習プログラムの総称、あるいは枠組みである。

本研究で取り上げる SEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at School) プログラムは、上記の SEL プログラムの一つであ

る。学校で、5つの基礎的社会的能力（自己への気づき、他者への気づき、自己のコントロール、対人関係、責任ある意志決定）と、3つの応用的社会的能力（生活上の問題防止のスキル、人生の重要事態に対処する能力、積極的・貢献的な奉仕活動）の合計8つの社会的能力の育成をねらいとした学習プログラムである（小泉, 2011）。

このSEL-8Sプログラムの効果を高めるためには、学校だけでなく家庭での働きかけも重要な意味をもつ（小泉, 2016）。これに関して、これまでも家庭との連携を意識した取り組みが実践されているが（例：橋本・小泉, 2013；大和・小泉, 2015）、保護者の家庭での養育態度・意識を直接確認してはいない。

そこで本研究では、保護者が学校で実施されているSEL（注：SEL-8Sプログラムに限定されない）を理解しそれに協力しようとする傾向が、実際の家庭での養育態度・意識に影響を与えているのかどうかを確認することを第1の目的とする。図1はこの影響過程を図示したものであるが、ここではこれを「子ども対象のSELによる子育て支援モデル」と呼ぶことにする。今回注目するのは、図1の保護者に関する部分である。モデル内の養育態度・意識の各「領域」は、発達段階や場面（家庭内、地域社会など）等によって内容が異なったり、数が変化したりする。

なお、研究対象となる学校ではSELプログラムが実践されている必要があるので、ここで本研究の協力を得た公立A小学校の実態と取り組みの概要を説明しておく。A小学校は多くの学年が単学級の小規模校で、保護者の就学援助受給率は4割に達している。SEL-8Sプログラムの実践は、2012（平成24）年の夏期校内研修会に第

1著者が講師として依頼を受けたのがきっかけである。翌2013（平成25）年度から本格的な実践が始まり、校内での授業研究会がもたれるとともに、9月中旬の土曜保護者参観日には、全クラスでSEL-8Sプログラムの学習が保護者に公開され、それに続いて、希望者に保護者講演会として第1著者によるSEL-8Sの紹介が行われるようになった。人事異動による新しい校長もこの実践を継続し、本研究の調査を実施した2015（平成27）年度は本格実践の3年目にあたる。この間、学級による若干のばらつきはあるが、学級通信やさらに学校だより等でSEL-8Sプログラムの実践が紹介され、また家庭での取り組み（家でのSEL-8Sプログラムの“課題”への協力や称賛など）が奨励されている。また、児童の自己評定による社会的能力の測定が年に2回ほど実施され、校内研修会でその見方や利用法も確認されている。さらに、入学前と卒業後の他教育機関等との連携を図るために、2014年9月には、新入児童が入学前に通っている幼稚園と保育所、それから卒業生の進学先の公立中学校と合同で、SEL-8Sプログラムの研修会がA小学校主導で開かれている。

以上がA小学校の取り組みの概要であるが、本研究では、以上の実践の成果としてのA小学校の保護者のSEL-8Sプログラムの認知と、保護者の養育態度・意識の実態を明らかにすることを第2の目的とする。なお、後者の養育態度・意識の実態については、福岡県の全体的傾向（福岡県立社会教育総合センター, 2013）が報告されているので、それとの比較によってその特徴を明らかにすることとする。

方法

調査対象者

A小学校の保護者153名に児童ごとに回答を求め、回答のあった138名分を分析対象とした。全児童数は193名であり、児童ベースの回答率は71.5%であった。回答のあった児童の学年と性別ごとの人数は、表1に示した通りである。なお、分析によっては一部欠損値のために分析対象者数が異なっていることがある。

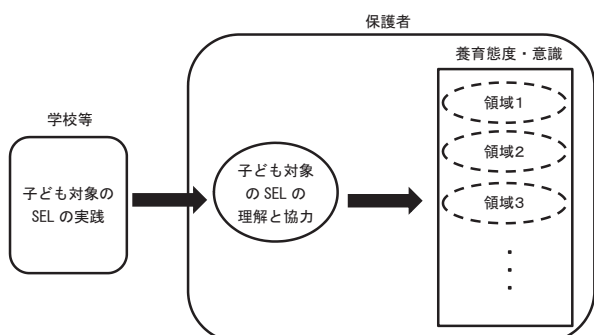


図1 子ども対象のSELによる子育て支援モデル

（注1）SEL（社会性と情動の学習）は多くの心理教育プログラムの総称である。

（注2）「領域」は、子どもの発達段階や場面等によって内容が異なったり、数が変化したりする。

表1 回答の対象となった児童数（人）

学年	1	2	3	4	5	6
男子	13	14	8	8	13	10
女子	9	10	15	19	9	10

調査時期と調査手続き

調査は2015年9月に、学校及びPTAの主催で実施し、児童を通して配布・回収した。回答は無記名とし、封筒に入れて封をして回収した後、研究者側で開封した。

調査内容

回答対象の児童の学年と性別を尋ねた後、4～9月の授業参観に行った回数(Q1)、SEL-8Sの認知(「学校で、『SEL-8S 人間関係づくり学習』をおこなっているのを知っていますか。」)(Q2)、家庭でのSEL-8Sプログラムの会話の頻度(「お子さんは、家で、『SEL-8S 人間関係づくり学習』の話をしますか。」)(Q3)を尋ねた。選択肢は、2～4であった。

それに続いて、福岡県内の保護者を対象にした「平成24年度 小学生をもつ保護者の養育態度・意識の実施に関する調査」(福岡県立社会教育総合センター, 2013)(以下、福岡県調査)の41項目の中から、家庭教育の実態把握についての必要度と、保護者の回答の負担を勘案して12項目を選択し、福岡県調査とほぼ同じ選択肢を設けて尋ねた(Q4～Q15)。福岡県調査は、1980(昭和55)年から5年ごとに実施され、2012(平成24)年度は、福岡県下8地区の13小学校の保護者に協力を求め、父親と母親を合わせて5,334名(回収率71%)から回答が得られている。福岡県内の保護者の養育態度・意識の実態を知る上では、重要な調査結果と考えられる。

分析手続きの概要

まず、SEL-8Sプログラムの認知に関して、授業参観回数などとの関連を検討する。次に、今回の調査結果を福岡県調査と比較することによって、A小学校の保護者の養育態度・意識の特徴を明らかにする。最後になるが、本研究の第1の目的である「子ども対象のSELによる子育て支援モデル」の妥当性を明らかにするために、今回の質問項目の範囲内で、保護者の養育態度・意識の領域を因子分析でいくつか抽出し、それを用いて構造方程式モデリングによって検討する。なお、以上の統計解析にはPASW Statistics 18.0

(SPSS)を用いた。

結果

SEL-8S プログラムの認知

表2に、授業参観の回数とSEL-8Sプログラムの認知等との関係を示した。SEL-8Sプログラムを知っているという回答は108人(79.4%)であり、授業参観回数が多いほど認知している者の割合は高くなっていた(2回, 72/80→90%:1回, 32/44→73%:0回, 4/12→33%)。

また、家庭でSEL-8Sプログラムについての会話をしている者は39人(28.7%)であった。授業参観回数との間には弱い相関($r=.29, p<.01$)が見られ、授業参観の回数が多いほど家庭でのSEL-8Sプログラムについての会話が多くなる傾向が見られた。

福岡県調査との比較

今回の調査での選択肢ごとの回答結果(割合)を表3に示した(具体的な質問項目内容は、表4を参照)。比較のために福岡県調査の母親の回答をカッコ内に示した。今回の調査では回答者が父親か母親かを尋ねていないが、大多数が母親であろうと推測し、福岡県調査(注:父親と母親別にしか集計されていない)でも母親($N=3,147$)の回答を比較の対象とした。

表3の選択肢の中で、福岡県調査と10%以上の開きがあり、かつ好ましい傾向にあるとして注目したものに○、逆の方向で注目したものに●を付した。その結果、決まった手伝いをさせている割合(Q12)は、2・5・6年生で福岡県調査よりも多くなっていた。

一方、ゲームの時間(Q7)については、全学年で1時間以下は少なく、福岡県調査よりも長時間になっていた。また、朝食摂取(Q4)は3・5年以外では、毎日食べている割合が福岡県調査よりも低かった。就寝時刻(Q5)も1・5・6年で、福岡県調査よりも遅い傾向が見られた。保護者の地域参加(Q15)の割合は、1・2・5年で低くなっていた。その他、1年ではあいさつのしつ

表2 授業参観回数と SEL-8S プログラムの認知及び家庭での会話の関係 (人)

	SEL-8Sの認知		家庭でのSEL-8Sの会話			
	知っている	知らない	よくする	ときどきする	ほとんどしない	全くしない
授業参観回数						
2回	72	8	2	26	35	17
1回	32	12	0	11	17	15
0回	4	8	0	0	5	8

表3 保護者の養育態度・意識質問紙の学年ごとの回答比率(%) (カッコ内は、2012年度の福岡県の母親データ)

質問内容	選択肢	1年	2年	3年	4年	5年	6年
Q1	3. 2回行った	54.5	50.0	78.3	65.4	50.0	50.0
授業参観	2. 1回行った	15.0	45.8	21.7	26.9	36.4	30.0
	1. 行っていない	8.8	4.2	0.0	7.7	13.6	20.0
Q2	2. 知っている	63.6	91.3	82.6	85.2	77.3	75.0
SEL-8S認知	1. 知らない	36.4	8.7	17.4	14.8	22.7	25.0
Q3	4. よくする	0.0	0.0	0.0	3.7	4.5	0.0
SEL-8Sについての会話	3. とときどきする	23.8	25.0	21.7	29.6	31.8	30.0
	2. ほとんどしない	33.3	45.8	56.5	40.7	40.9	30.0
	1. 全くしない	42.9	29.2	21.7	25.9	22.7	40.0
Q4	4. 毎日食べている	●77.3 (87.3)	●75.0 (88.9)	78.3 (86.5)	●77.8 (88.6)	90.9 (88.7)	●75.0 (88.3)
朝食摂取	3. ほとんど毎日食べている	18.2 (9.8)	20.8 (8.8)	13.0 (8.7)	11.1 (7.8)	9.1 (8.6)	20.0 (6.6)
	2. とときどき食べている	4.5 (2.8)	4.2 (1.7)	8.7 (4.2)	11.1 (3.1)	0.0 (3.9)	0.0 (4.3)
	1. 食べていない	0.0 (0.2)	0.0 (0.6)	0.0 (0.4)	0.0 (0.5)	0.0 (0.6)	5.0 (0.9)
Q5	5. 午後8時前	0.0 (1.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.2)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.2)
就寝時刻	4. 午後8時～9時	13.6 (20.1)	8.3 (17.4)	4.3 (9.7)	3.7 (7.6)	4.5 (4.1)	0.0 (2.5)
	3. 午後9時～10時	●86.4 (61.2)	58.3 (61.6)	65.2 (63.2)	63.0 (57.0)	○59.1 (48.4)	25.0 (38.0)
	2. 午後10時～11時	0.0 (16.5)	25.0 (20.2)	21.7 (24.6)	29.6 (31.9)	31.8 (41.2)	●60.0 (48.7)
	1. 午後11時以降	0.0 (0.8)	8.3 (0.8)	8.7 (2.0)	3.7 (3.3)	4.5 (5.9)	15.0 (10.7)
Q6	6. 1時間以下	13.6 (11.8)	12.5 (11.8)	4.3 (8.3)	11.1 (12.2)	18.2 (10.4)	15.8 (8.2)
テレビ視聴時間	5. 1～2時間	31.8 (36.5)	37.5 (38.2)	○52.2 (40.2)	22.2 (37.7)	31.8 (35.5)	31.6 (36.2)
	4. 2～3時間	31.8 (30.7)	○20.8 (31.9)	21.7 (30.9)	25.9 (31.9)	22.7 (27.0)	26.3 (30.0)
	3. 3～4時間	13.6 (14.7)	16.7 (11.5)	13.0 (13.2)	18.5 (11.8)	18.2 (18.2)	15.8 (17.1)
	2. 4～5時間	9.1 (5.2)	12.5 (5.5)	4.3 (5.1)	14.8 (5.4)	9.1 (6.1)	5.3 (6.9)
	1. 5時間以上	0.0 (0.8)	0.0 (1.0)	4.3 (2.0)	7.4 (0.9)	0.0 (2.7)	5.3 (1.6)
Q7	6. 1時間以下	●45.5 (83.9)	●54.2 (85.3)	●56.5 (76.2)	●48.1 (74.6)	●40.9 (72.7)	●15.0 (69.7)
ゲームの時間	5. 1～2時間	●22.7 (11.2)	●33.3 (9.9)	26.1 (18.4)	18.5 (17.2)	27.3 (21.7)	●30.0 (19.9)
	4. 2～3時間	●31.8 (2.6)	8.3 (3.4)	●13.0 (2.8)	18.5 (5.4)	●22.7 (4.3)	●30.0 (7.3)
	3. 3～4時間	0.0	4.2	4.3	7.4	4.5	5.0
	2. 4～5時間	0.0 (2.0)	0.0 (0.8)	0.0 (2.0)	7.4 (1.8)	4.5 (1.0)	0.0 (2.5)
	1. 5時間以上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	20.0
Q8	4. 必ずさせている	●68.2 (79.9)	87.5 (78.1)	●65.2 (77.4)	77.8 (80.6)	86.4 (77.9)	○90.0 (76.6)
あいさつのしつけ	3. とときどきさせている	31.8 (18.9)	12.5 (18.5)	26.1 (21.0)	18.5 (16.7)	13.6 (18.4)	10.0 (19.4)
	2. あまりさせていない	0.0 (1.2)	0.0 (2.9)	8.7 (1.4)	3.7 (2.7)	0.0 (2.9)	0.0 (3.4)
	1. 全くさせていない	0.0 (0.0)	0.0 (0.4)	0.0 (0.0)	0.0 (0.0)	0.0 (0.4)	0.0 (0.5)
Q9	2. はい	100 (96.6)	91.7 (97.5)	100.0 (95.4)	88.9 (97.3)	90.9 (95.5)	95.0 (95.9)
あいさつ注意	1. いいえ	0.0 (3.0)	8.3 (2.5)	0.0 (4.4)	11.1 (2.7)	9.1 (4.3)	5.0 (4.1)
Q10	2. はい	40.9 (46.8)	○58.3 (44.8)	39.1 (44.6)	●33.3 (46.3)	31.8 (39.5)	30.0 (38.4)
テレビのきまり	1. いいえ	59.1 (53.2)	41.7 (54.6)	60.9 (55.2)	66.7 (53.5)	68.2 (59.8)	70.0 (60.9)
Q11	4. よくある	●4.5 (15.9)	0.0 (8.2)	4.3 (6.3)	3.7 (3.3)	0.0 (2.3)	5.0 (1.4)
読み聞かせ	3. とときどきある	40.9 (50.0)	50.0 (41.0)	26.1 (30.5)	29.6 (25.4)	27.3 (18.0)	5.0 (13.1)
	2. ほとんどない	●40.9 (27.5)	33.3 (39.5)	52.2 (47.5)	○37.0 (51.2)	45.5 (46.7)	40.0 (45.3)
	1. 全くない	13.6 (6.4)	16.7 (11.3)	17.4 (15.6)	29.6 (20.1)	27.3 (32.8)	50.0 (40.1)
Q12	4. いつも参加する	50.0 (43.4)	○62.5 (45.8)	56.5 (48.3)	57.7 (54.1)	○72.7 (55.3)	○75.0 (56.5)
手伝い	1. いいえ	50.0 (55.8)	37.5 (53.6)	43.5 (51.1)	42.3 (45.6)	27.3 (44.3)	25.0 (43.2)
Q13	2. はい	77.3 (83.7)	79.2 (86.6)	●73.9 (90.4)	88.9 (91.6)	81.8 (90.4)	90.0 (93.3)
社会の話	1. いいえ	22.7 (16.3)	20.8 (13.4)	26.1 (9.3)	11.1 (8.2)	18.2 (9.3)	10.0 (6.7)
Q14	4. よくある	54.5 (59.8)	58.3 (54.8)	47.8 (54.1)	51.9 (53.7)	54.5 (53.1)	50.0 (52.6)
傾聴	3. とときどきある	40.9 (38.4)	41.7 (42.6)	47.8 (44.0)	37.0 (44.3)	40.9 (44.5)	50.0 (45.8)
	2. ほとんどない	4.5 (1.6)	0.0 (2.3)	4.3 (1.6)	11.1 (1.8)	4.5 (2.0)	0.0 (1.6)
	1. 全くない	0.0 (0.2)	0.0 (0.4)	0.0 (0.0)	0.0 (0.2)	0.0 (0.2)	0.0 (0.0)
Q15	4. いつも参加する	18.2 (16.9)	●8.3 (19.7)	17.4 (19.0)	22.2 (19.1)	18.2 (21.1)	15.0 (20.2)
地域参加	3. とときどき参加する	●36.4 (54.4)	50.0 (55.9)	52.2 (54.9)	48.1 (54.6)	45.5 (51.8)	55.0 (53.8)
	2. あまり参加しない	22.7 (20.5)	20.8 (17.9)	17.4 (18.6)	18.5 (19.8)	13.6 (18.0)	20.0 (17.4)
	1. 全く参加しない	●22.7 (7.0)	●20.8 (5.5)	13.0 (5.9)	11.1 (4.9)	●22.7 (7.6)	10.0 (7.1)

(注1) カッコ内は、福岡県社会教育総合センター (2013) によるもので、一部ここでは記載していない「無回答」があるために、合計が100%にならない項目がある。また、選択肢の数が本研究の調査と同一でない項目 (Q7) は、該当する選択肢の回答を合計して示した。

(注2) ○は、福岡県社会教育総合センター (2013) の回答結果と比べて10.0%以上の開きがあり、かつ好ましい方向にある選択肢として注目したものであり、●は逆に好ましくない方向にある選択肢として注目したものである。

け (Q8)、読み聞かせ (Q11) が低く、また3年はあいさつのしつけ (Q8) と社会の出来事の話 (Q13) に低い傾向が見られた。

なお、テレビ視聴時間 (Q6) については、3年で福岡県調査よりも短めの傾向が見られたものの、2年は2～3時間が少な目であった分、より

長時間の方に分布が広がっていた。テレビ視聴の時間のきまり (Q10) については、2年で福岡県調査より高く、4年で低くなっていた。

保護者の養育態度・意識項目の因子分析

保護者の養育態度・意識のおもな領域を抽出するために、Q4～Q15の12項目の回答について

因子分析（最尤法，プロマックス回転）を実施した。2～5 因子解を検討した結果，3 因子解以上では一つの因子に複数の項目を設定することができない場合があったため，2 因子解を採用した。分散の説明率は 40.2% で，表 4 は因子負荷量等を示したものである。

第 1 因子はテレビ視聴時間，就寝時刻，ゲームの時間，朝食摂取の項目から成っているため「生活リズムのしつけ」因子と命名した。第 2 因子は

地域参加，社会の話，あいさつのしつけ，読み聞かせの項目で構成されているので，「社会への関心と喚起」因子とした。

「子ども対象の SEL による子育て支援モデル」の検証

モデルの検証をする前に，質問項目間の回答の関連を見てみると，例えば SEL-8S を認知していると，あいさつを必ずさせている割合が高かった（図 2）。また，SEL-8S プログラムについての会

表 4 保護者の養育態度・意識質問紙の因子分析結果

Q	質問項目	F1	F2	選択肢	Mean	SD	共通性
【F1】							
6	お子さんは、ふだん1日にどれくらいテレビ（ビデオも含めて）を見ていますか。	.659		6	4.15	1.27	.49
5	お子さんは、平日だいたい何時に寝ていますか。	.580	-.320	5	2.65	0.69	.31
7	お子さんは、ふだんテレビゲーム（携帯型ゲーム、ネットゲーム等も含む）を1日にどれくらいしていますか。	.534		6	4.97	1.22	.37
4	お子さんは、朝ごはんを食べていますか。	.389		4	3.72	0.59	.20
【F2】							
15	あなたは、地域の行事や活動に参加していますか。		.620	4	2.64	0.95	.34
13	おなたは、お子さんに社会の出来事について話をすることがありますか。		.512	2	1.82	0.39	.26
8	あなたは、お子さんに「行ってきます」「おはよう」などのあいさつをするようにしつけていますか。		.423	4	3.77	0.47	.20
11	あなたは、お子さんに本を読むことがありますか。		.330	4	2.11	0.82	.18
【その他】							
9	あなたは、お子さんが近所の人や友達にあっても挨拶しなかったら、注意しますか。		.262	2	1.94	0.23	.08
10	あなたは、お子さんがテレビを見る時間に何かきまりをつくっていますか。	.255	.282	2	1.39	0.49	.19
12	あなたは、現在、お子（こ）さんに何か決まったお手伝いをさせていますか。			2	1.62	0.49	.06
14	あなたは、お子さんの話をじっくり聞くことがありますか。		.263	4	3.49	0.58	.12
因子間相関		.343					

（注）因子負荷量は.200以下を省略

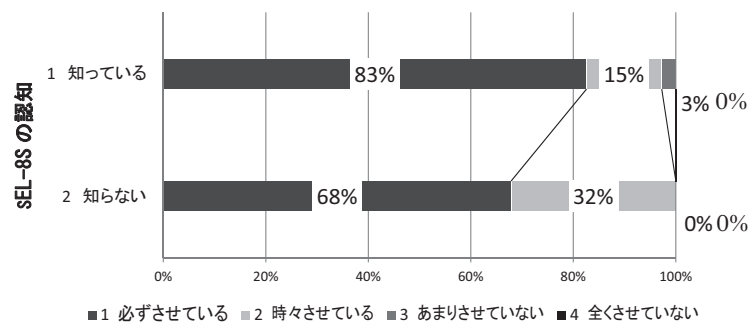


図 2 SEL-8S の認知 (Q2) とあいさつのしつけ (Q8) との関連

話をよくする保護者ほど、本の読み聞かせの頻度も高くなっていた（図3）。

このように、個々の項目間の回答の関連を見ていくと、「子ども対象のSELによる子育て支援モデル」（図1）の保護者に関する部分を支持しているように思えるが、その確認は容易ではない。

ここでは、モデルの確認のために構造方程式モデリングを用いて検討した。潜在変数として「子ども対象のSELの理解と協力」「生活リズムのしつけ」「社会への関心と喚起」の3つを設定し、それぞれに図に示したような観測変数を割り当てた。「子ども対象のSELの理解と協力」は、A小学校ではSEL-8Sプログラムの認知に影響を与え

るのはもちろんであるが、その学習のようすを見ることができる授業参観への出席や、また家庭でのSEL-8Sプログラムについての会話にも影響すると考えられる。「生活リズムのしつけ」「社会への関心と喚起」の2つの潜在変数は、保護者の養育態度・意識の因子分析の結果（表4）に基づくものである。

分析の結果は図4に示した通りであり、適合度係数はCFI=.920, AGFI=.874, CRFI=.863, RMSEA=.067, AIC=115.4であった。最適とはいえないが、一定程度適合しているモデルと考えられる。

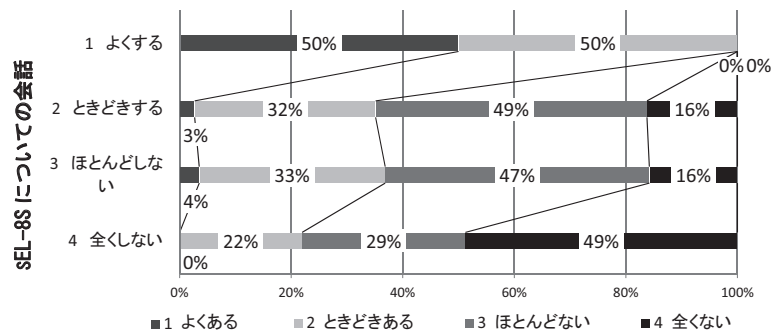


図3 SEL-8S についての会話（Q3）と読み書かせ（Q11）の関連

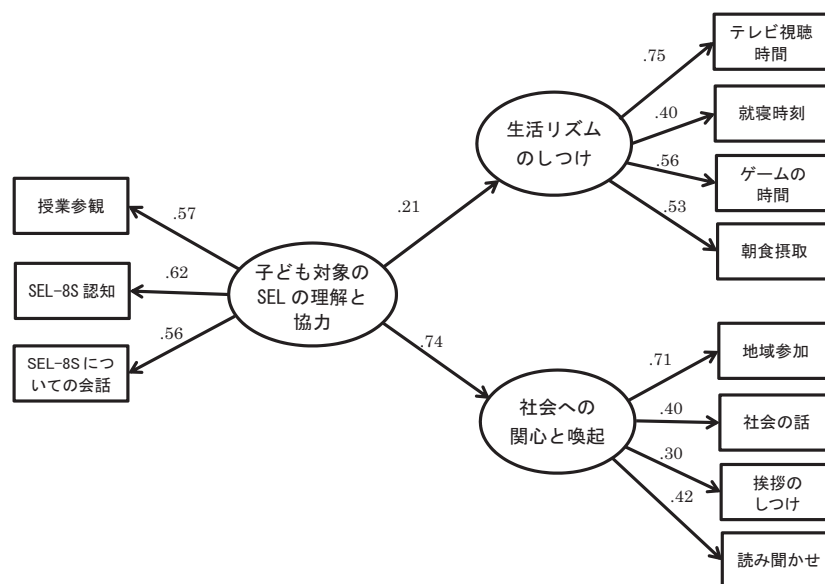


図4 「社会性と情動の学習（SEL）の理解と協力」が養育態度・意識に与える影響についての構造方程式モデリングの結果

（注）誤差変数は省略してある。

考察

SEL-8S プログラムの認知

本研究の第2の目的の一部である、A 小学校の保護者の SEL-8S プログラムの認知については、学校全体で SEL-8S プログラム実践に取り組みを始めて3年目ということで、表2の結果から保護者の間でこのプログラムの認知が進んでいることがわかる。また、授業参観回数が多いほど、SEL-8S プログラムの認知の割合が高く、かつ家庭での SEL-8S の会話の頻度も多いということから、これらが相互に関連していると考えられる。学校からは、学級通信や学校だよりを通して SEL-8S プログラムが「SEL-8S 人間関係づくり学習」として紹介され、また9月の授業参観日には全学級が一斉に SEL-8S プログラムの学習のようすを保護者に公開している。こうした取組が SEL-8S プログラムの認知度を高め、さらに授業参観への意欲付けやまた家庭での SEL-8S に関する会話を促進していると推測される。

アメリカでは「保護者の夕べ」と称して、子ども連れて保護者が学校を訪問するようなイベントが開かれることがある。そうしたおりに SEL の紹介や説明をして、保護者の関心を高めて学校と家庭の連携を進める工夫がされている（イライアスら、1999）。わが国でも、地域や保護者の実態に合わせたさらなる工夫が求められるであろう。

A 校の保護者の養育態度・意識の実態

これは、本研究の第2の目的の一部であるが、福岡県内の実態との比較を示した表3からわかるように、決まった手伝いをさせている割合が高いなど好ましい傾向にあるものもあるが、ゲームの時間が長い、朝食摂取の割合が低い、就寝時刻が遅いといった傾向が見られ、家庭生活の課題として考えるべき項目が多かった。また、低中学年の一部ではあいさつのしつけや読み聞かせなどでも、県の実態より低い項目があった。

朝食を毎日食べさせる、幼少期に絵本の読み聞かせをする、テレビゲームで遊ぶ時間を限定するといった子どもへの関わり方が、学力の高低と関係があることが報告されており（浜野、2008）、学力向上を意図するなら、具体的な対策が必要であろう。

「子ども対象の SEL による子育て支援モデル」

本研究の第1の目的が、SEL の理解やこれに関する学校との協力が、家庭での保護者の養育態度・意識に影響を及ぼしているのかどうかを確認することであった。構造方程式モデリングによる

「子ども対象の SEL による子育て支援モデル」検討の結果、一定程度の適合を確認することができた。

学校と保護者の連携の必要性が随所で語られながら、実践上の具体策は模索されているのが実情である。その点で、今回の分析結果は大きな意味をもつ。すなわち SEL-8S プログラムに限らず、保護者が社会性と情動の学習（SEL）への理解を深め、その点で学校との協力を意識しているならば、それが子どもの生活リズムのしつけや、保護者自身の社会への関心と子供にそうした関心を喚起させる働きかけが増える可能性があることを示唆したからである。

保護者が社会性と情動の学習（SEL）への理解を深め、学校との協力を強めるために A 校が実施していることは、SEL-8S プログラムの授業実践（学習ユニットによっては、その学習効果を高めるために家庭での保護者の協力が必要）、学級通信や学校だより等での周知と啓発、保護者参観での SEL-8S プログラム学習の公開、その折の SEL-8S プログラムに関するポスター掲示、保護者対象の講演会での説明などである。今後も、例えば保護者参観者を増やすために積極的な参加を求める案内を工夫したり、授業参観時に保護者向けの SEL-8S プログラムに関する簡単な説明文書を用意したりする方法が考えられる。各学級での、保護者対象の短いワークショップも効果的であろう。図4の「子ども対象の SEL の理解と協力」から「生活リズムのしつけ」と「社会への関心と喚起」の矢印は、保護者へのこうした働きかけが、子どもの家庭生活の向上に影響する可能性を示すものである。

これまでの研究で、社会性と情動の能力が、直接、あるいは一部自尊感情を介して規範行動の認知に影響し、それが実際の規範行動に影響を与える過程（図5）が確認されている（Koizumi & Yamada, 2016）。したがって、社会性と情動の能力の向上に学校だけでなく家庭も加われば、より大きな教育効果が期待できるであろう。今後のさらなる取組の推進が望まれる。

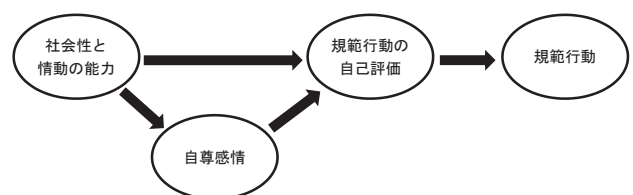


図5 社会性と情動の能力から規範行動への影響過程（Koizumi & Yamada, 2016）

今後の課題

A 小学校は保護者の就学援助受給率が4割に達しているが、このように家庭環境が厳しい家庭が多いと考えられる学校において、SEL-8Sプログラムをさらに継続して実施し、学校と家庭の連携によって、実際に保護者の養育態度・意識の変容が見られることを確認する必要がある。その確認のためには、時系列を追った縦断研究が必要である。

また、今回の保護者の養育態度・意識調査は、保護者の回答の負担を考慮して項目数をかなり絞り込んだが、より幅広い内容を検討することによって、養育態度・意識の全体への影響を検討することが可能となる。保護者との関係が変化する中学生段階での学校と家庭との連携についても、検討が必要である。

さらに、直接、保護者の子育て支援をめざした学習プログラムの実施も検討する必要がある。従来の保護者向け学習プログラムは、ほとんど学校の教師が実施することを想定していないため（藤田・小泉, 2016）、学校と家庭の連携を進めるためには新たな視点からのプログラム開発が必要であると考えられる。

引用文献

- 藤田尋子・小泉令三（2016）家庭教育支援における保護者向け学習プログラムの分析－教師による学校・家庭連携推進の視点から－福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 6, 39-46.
- 浜野 隆（2008）家庭での環境・生活と子どもの学力 ベネッセ教育総合研究所 教育格差の発生・解消に関する調査研究報告書 [2007年～2008年]
- 橋本智恵・小泉令三（2013）対人関係能力を育て自尊感情を高めるための社会性と情動の学習プログラム実践－家庭との連携を重視した

SEL-8S プログラムの実践－福岡教育大学紀要, 62(4), 155-168.

イライアス M.J.・ジンズ J.E.・ワイスバーグ R.P.・フレイ K.・グリーンバーグ M.T.・ハイネス N.M.・ケスラー R.・シュワーズストーン M.E.・シュライバー T.P. 小泉令三（編訳）（1999）社会性と感情の教育－教育者のためのガイドライン 39－北大路書房.

小泉令三（2011）子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 1 社会性と情動の学習〈SEL-8S〉の導入と実践 ミネルヴァ書房

小泉令三（2016）社会性と情動の学習（SEL）の実施と持続に向けて－アンカーポイント植え込み法の適用－教育心理学年報, 55, 203-217.

Koizumi, R., & Yamada, Y. (2016). Students' social and emotional competence promoting positive social relationships and skills. *International Journal of Criminology and Sociology*, 5, 105-112.

内閣府（2015）平成 27 年版 子供・若者白書
大和和雄・小泉令三（2015）家庭と学校で共に育む子どもの学校適応に関する研究－SEL-8S プログラムによる人間関係づくりと「共育」の試行的取組－福岡教育大学大学院教職実践専攻年報, 5, 47-54.

山崎勝之・戸田有一・渡辺弥生（編著）（2013）世界の学校予防教育 金子書房

付記

本研究は、平成 27 年度福岡教育大学 COC 事業「学校と保護者の連携による保護者の教育力向上－子どもの社会的能力向上をめざす取組を通しての保護者の子育て支援－」（研究代表者：小泉令三）の助成によるものである。研究の遂行に多大なるご協力をいただいた A 小学校校長および関係者の皆様に、心からお礼申し上げる。